「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群に関わる調査研究事業
二〇二二年度調査概要

はじめに

世界遺産「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群に関わる調査研究は、福岡県・宗像市・福津市・宗像大社からなる「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会によって進められている。

今年度は、令和二年度から世界的に大流行した新型コロナウイルス感染症の流行も沈静化し、漸く人流が戻るとともに、対面でのイベントや調査なども行われるとともに、これまでの遅れを取り戻すように慌ただしく過ぎ去った一年であった。以下、各調査研究の概要を以下に報告する。

一　特別調査研究事業

世界遺産委員会登録時の勧告にもとづき、本遺産群に関わる古代東アジアにおける航海や交流、祭祀についての調査研究を二〇一八年より進めてきた。二〇二〇年度から二〇二一年度にかけては、新型コロナウイルス感染症の影響で中止を余儀なくされたが、今年度は、ようやく沈静したこともあり、対面で行う調査や会議を再開することができた。

現地調査については、国内における航海・交流・信仰に関わる文化遺産や博物館等の視察として能登半島と対馬を訪れた。

また今年度は本事業の最終年度として、古代東アジアにおける航海や交流、海洋信仰に関するこれまでの視察および三度の国際検討会での議論を踏まえ、宗像・沖ノ島をどう理解すべきかについて、各委託研究者がそれぞれの専門的見地から報告文を作成した。

総括検討会では、各委託研究者が提出した報告文に基づき報告を行い、それを元に航海・交流、祭祀・信仰のそれぞれの側面から討論を行い現時点での到達点を確認するとともに、今後の課題について整理を行った。

成果報告会は本事業の成果を一般向けに公開するもので、各報告者が講演するとともに、これまでの議論を総括する形での討論が行われた。

各委託研究者の報告文を含む本事業の成果をまとめた報告書は、今年度末に刊行予定である。

視察一　石川県能登地方　令和四年八月一〇日から一二日

八月一〇日　羽咋市歴史資料館、シャコデ廃寺、寺家遺跡、　気多大社、滝大塚古墳、福浦港

八月一一日　舳倉島、真脇遺跡縄文館、穴水大宮、重蔵神社

八月一二日　白山神社、岩倉寺・石倉比古神社、上時国家、禄剛崎、須須神社、見附島

参加者：

佐藤信（専門家会議副委員長、東京大学名誉教授、歴史学）

秋道智彌（山梨県立富士山世界遺産センター）

笹生衛（國學院大学教授、考古学（祭祀・神道））

田中史生（早稲田大学教授、歴史学（交流））

禹在柄（韓国・忠南大学校教授、考古学（交流））

王海燕（中国浙江大学教授、歴史学（交流））

岡寺未幾（福岡県九州国立博物館・世界遺産室）

大高広和（九州国立博物館）

池ノ上宏（福津市文化財課）

福嶋真貴子（宗像大社文化局）

視察二　長崎県対馬市　令和四年一一月四日から六日。

当初、令和四年三月の予定がコロナにより延期。九月に予定していたが台風により中止、再調整の上、十一月の実施となった。

一一月四日　小船越・西漕手、小船越・阿麻氐留神社、梅林寺、烏帽子岳展望所、仁位・和多都美神社、千尋藻・六御前神社、佐賀・円通寺、佐賀・和多都美神社（宗像八幡宮）、胡籙御子神社、大増・宗像神社

一一月五日　豊・那祖師神社、千俵蒔山展望台、佐護・天神多久頭魂神社、佐護・神御魂神社、木坂・海神神社、黒瀬・黒瀬観音堂、鶏知（けち）・根曽古墳群、対馬博物館、厳原・八幡宮神社

一一月六日　豆酘・多久頭魂神社、浅藻・天道法師塔（表八丁角）、天道法師祠（裏八丁角）、小茂田浜、小茂田・矢立山古墳、曲集落、鶏知・住吉神社

参加者：溝口孝司（専門家会議委員、九州大学教授、考古学）・秋道智彌・田中史生・禹在柄・岡寺未幾・大高広和

総括検討会　令和四年一二月一七・一八日（土・日）

場所：アクロス福岡（福岡市内）

報告一　秋道智彌

「先史・古代の東アジア海域世界－航海と海域ネットワークからみた世界遺産モデル－」

報告二　禹在柄

「沖ノ島祭祀遺跡と竹幕洞祭祀遺跡からみた倭国と百済との交流」

報告三　笹生衛

「宗像・沖ノ島にみる祭祀の意味と中世への変容」

報告四　田中史生

「「秦氏本系帳」と宗像の神」
事務局報告　岡寺未幾・岡崇・池ノ上宏
「登録後五年間の調査研究成果について」
討論
議　長　：佐藤信・溝口孝司
討論参加者：王海燕
：岡田保良（日本イコモス国内委員会委員長）
：鈴木地平（文化庁文化資源活用課文化遺産国際協力室）

成果報告会　令和五年三月一二日（日）
場所：九州国立博物館ミュージアムホール
報告一　秋道智彌
「航海と海域ネットワークからみた世界遺産モデル」
報告二　禹在柄
「沖ノ島祭祀遺跡と竹幕洞祭祀遺跡からみた倭国と百済との交流」
報告三　高田貫太
「古墳時代の日朝交渉における海の道―朝鮮半島南・西海岸地域の　倭系資料の分析を中心に―」
報告四　田中史生
「秦氏と宗像の神―「秦氏本系帳」を手がかりとして―」
報告五　笹生衛
「宗像・沖ノ島における祭祀の意味と中世への変容―人間の認知機能と環境変化の視点から―」
パネルディスカッション
「沖ノ島研究の新地平―五年間の研究を振り返って」
議　　長：佐藤信（司会）・溝口孝司
パネリスト：岡田保良・鈴木地平
（福岡県九州国立博物館・世界遺産室　岡寺未幾）

二　宗像大社にかかる調査研究

（一）考古資料

考古資料の調査・整理作業は昨年から引き続き、宗像大社・宗像市文化財課を中心として、福岡県文化財保護課、同世界遺産室、同九州歴史資料館、宗像市世界遺産課で行っている。

ア．沖ノ島祭祀遺跡出土の奉献品の保存管理

宗像大社の所蔵する国宝沖ノ島出土品は、宗像市沖ノ島で四世紀後半から九世紀にかけて行われた国家的祭祀の奉献品で、昭和二九（一九五四）年から四六（一九七一）年にかけて実施された三次の学術調査の出土品と島内で不時発見され辺津宮へ移され保管されてきた伝世品がある。これら約八万点を数える国宝は、昭和三四（一九五九）年の指定から六〇年以上経過し、近年、保存管理の上でさまざまな課題が生じてきた。

そこで、本国宝を後世へ確実に継承できるよう、適切な保存管理および

活用等の基本指針を定めるため、所有者である宗像大社が事業主体となり令和四年度から二ケ年で国宝福岡県宗像大社沖津宮祭祀遺跡出土品ならびに国宝伝福岡県宗像大社沖津宮祭祀遺跡出土品（以下「国宝沖ノ島出土品」）保存活用計画を策定することにした。本年度は国宝沖ノ島出土品保存活用計画策定委員会及び、宗像大社・福岡県九州歴史資料館・宗像市で構成される国宝沖ノ島出土品保存活用計画策定ワーキンググループを立ち上げ、月一回程度のワーキング及び三回の委員会を開催、さらに出土品や施設環境に関するオブザーバーや策定委員会委員の現地調査を行った。計画の章構成は全一三章とし、八章までの作成と審議を終えた。なお、現段階の章構成は次のとおりである。

第一章　計画策定の経緯と目的
第二章　指定に至る経緯と基本的情報
第三章　本質的価値と新たな価値評価の視点
第四章　現状と課題
第五章　大綱と基本方針
第六章　調査研究
第七章　保存・管理
第八章　活用
第九章　防火・防犯
第一〇章　施設整備
第一一章　運営・体制
第一二章　施策の実施計画の策定と実施
第一三章　経過観察

（宗像市文化財課・白木英敏）

イ．国宝管理台帳

二〇一八年度以降、宗像大社、福岡県、宗像市と一体で国宝管理台帳の作業を進めている。国宝沖ノ島出土品の管理は、これまで紙台帳で管理されてきたが、二〇二〇年以降、国宝管理台帳のデジタル化作業を進めてきた。デジタル・アーカイブMUNAKATA ARCHIVESに管理者のみ閲覧可能なデータベースを作成してきたが、個別データの入力・確認作業をおこなった。データベースは基本台帳・土器台帳・貸出履歴・保存処理履歴からなり、基本台帳・土器台帳が管理の基本となるものである。

基本台帳は、国宝の管理番号にもとづくもので、現時点で管理番号から分割可能な個別データを登録。管理番号に基づく紙台帳は五〇四頁であったが、登録された個別データは七七六四点となる。

土器台帳は土器詳細遺物台帳掲載のデータを格納するものである。土器については、国宝のうち管理番号を持たないものや、国宝に登録されていないものもあり、別途台帳を作成している。土器台帳については、第一・二次調査にかかるもの一三四三点、第三次調査にかかるもの二二二八点、計三五七一点の登録を行なった。

また、現時点で登録可能な貸出履歴・保存処理履歴についても入力作業を行った。

（岡寺未幾）

ウ．土器詳細遺物台帳の作成

二〇一七年度より報告書に基づく土器詳細遺物台帳の作成作業を九州大学考古学研究室と行っている。本年度の作業は、新型コロナウイルス感染拡大の時期を避けながら、二〇二二年五月一三日から二〇二三年三月下旬までに計一四回、沖ノ島祭祀遺跡調査報告書と照合できなかった土器・土製品資料約二五〇点のうち、昨年度未着手だった約六〇点について、台帳化作業ならびに作成台帳の内容見直しを行った。二〇二三年三月、関係者で協議し、今年度作業の進捗と来年度の作業内容を確認した。

（宗像大社文化局　福嶋真貴子）

エ．沖ノ島祭祀遺跡に関連する写真・図面資料

沖ノ島祭祀遺跡関連写真の整理作業については、前年度分のスライドフィルム及び焼付け写真整理登録作業を二〇二二年二月八日の通算一三四回目に第一九九冊から着手し、三月二三日の通算一四〇回目に第二〇三冊の途中まで行った。内容は第三次調査の現地調査状況や報告書作成のための中国大陸現地調査、沖ノ島の自然と植物である。

当該年度は四月六日の通算一四一回目に第二〇三冊の第三次調査の現地調査状況の登録作業に着手し、八月九日の通算一五二回、第二〇五冊までの作業を終了した。内容は第三次調査の現地調査及び報告書作成に伴う関連調査である。このほかに、宗像大社蔵鏡・馬具の焼付写真を第三一〇冊から三一五冊として整理登録した。下半期は本作業を中断した。

（宗像市文化財課　原俊一）

沖ノ島祭祀遺跡の学術調査にかかる写真のデジタル化については、二〇二〇年から作業を進めてきたが、なお膨大な量が残されている。今後作業を進める上で管理を容易にするため主要な写真アルバム八九冊をスキャン、ＰＤＦ作成作業を行った。また一部、特に祭祀遺構に関係のある部分については、画像の切り抜き作業を行った。

図面に関しては、神宝館に収蔵されていた「沖ノ島祭祀遺跡調査報告図」の青焼き図面のスキャンを行った。これは昭和五八（一九八三）年に国立歴史民俗博物館の委託を受け株式会社トータルメディア開発研究所が作成したものであり、現在、展示されている実物大の沖ノ島祭祀遺跡の模型制作のため、測量および植生調査を行なった際の記録と考えられる。

（岡寺未幾）

（二）文献資料

二〇一七年度から継続して「宗像清文氏奉納文書」のうち書簡・公文書などの一紙ものの目録作成作業を行っているが、二〇二〇・二〇二一年度と新型コロナウイルス感染症の影響を受けてほとんど作業ができなかった。今年度もオミクロン株による感染拡大や関係者のスケジュールの都合によりなかなか作業が実施できなかったが、一一月から作業を再開した（年度内計四度実施予定）。作業は新修宗像市史編集作業も兼ねて、宗像大社文化局に加え、九州国立博物館（福岡県立アジア文化交流センター）、九州歴史資料館が協力して行っている。来年度も継続して行う予定である。

（九州国立博物館　大高広和）

（三）経過観察

ア．「宗像神社境内」全体に関する調査

宗像大社沖津宮である沖ノ島、小屋島、御門柱、天狗岩の構成資産については、周辺海域を含めた釣人などのモニタリング調査を一一回（一月九日、二月一一日、三月一二日、四月一七日、五月三日、七月二日、八月二八日、九月二七日、一〇月一五日、一一月一九日、一二月一〇日）実施した。その内、一〇月一五日には各祭祀遺跡の詳細なモニタリング調査を行った。

また、中津宮では、一一月一九日に祭祀遺跡等のモニタリング調査を行った。辺津宮では、一〇月四日に宗像市市民の会と共に資産の見回り活動を実施、一一月二四日には祭祀遺跡等のモニタリング調査を行った。現地調査関係者は以下の通りである。

宗像市世界遺産課　合島賢二・岡崇・池田拓・髙村光司郎・鎌田隆徳
福岡県九州国立博物館・世界遺産室　正田実知彦

イ．宗像大社沖津宮の調査

昨年に引き続き、9号遺跡及び10号遺跡における遺物の出土状況について、重点的にモニタリング調査を実施した。その結果、新たに確認された金銅製品は1点に留まったものの、昨年までに確認されていた遺物を再確認することはできなかった。このことから、今年は遺跡内におけるオオミズナギドリの営巣活動が少なかったものの、遺跡内を通過するオオミズナギドリは例年どおり存在したことが想定される。

また、一〇号東側遺跡については、金銅製品の破損や遺物の移動が認められた。これは、台風の通過やオオミズナギドリの移動に伴って生じたものと想定される。

遺跡全体を通じて、台風通過による小枝の折損や落葉によって、地面が覆われ、遺物の出土状況が分かりにくい状態となっている。

なお、小屋島・御門柱・天狗岩については、大きな変化は認められなかった。

ウ．宗像大社中津宮の調査

御嶽山祭祀遺跡では、昨年と同様、御嶽神社南側の斜面において、須恵器片や土師器片の散布を確認した。その他、大きな変化は見られなかった。

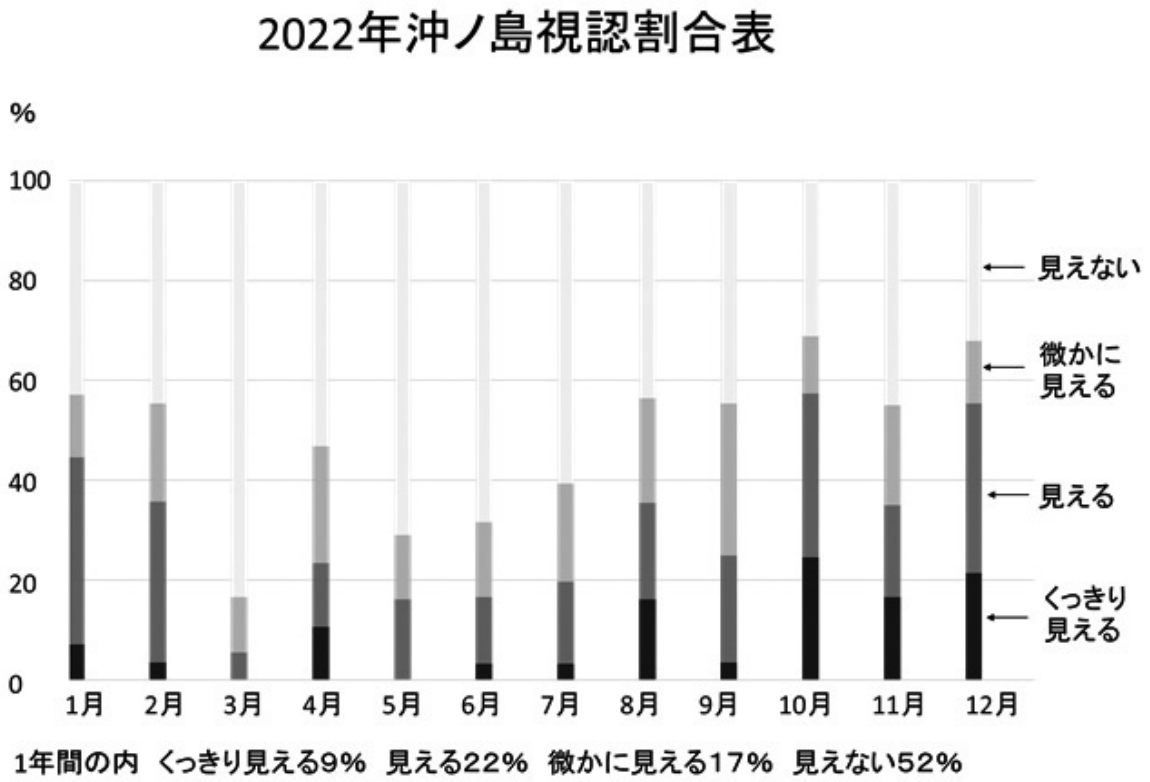
エ．宗像大社辺津宮の調査

下高宮祭祀遺跡では、昨年と同様、高宮祭場周辺の四ヶ所から、須恵器片や土師器片の散布が確認された。その他、大きな変化は認められなかった。

オ．その他の調査

・台風による影響

二年連続通過した台風の影響で、やや衰弱していたタブノキ等の多くが枯損し、その影響で祭祀遺跡内は徐々に明るくなってきている。そのため、



図一　2022年沖ノ島視認調査結果

今後は遺跡内にも下草が繁茂する可能性が高くなると思われる。

なお、沖の島漁港においては、西側テトラポットに溜まっていた漂着ごみが今回の台風による高波によって海洋に放出され残されていなかった。

また、沖の島漁港東側ののり面裾部が高波によって削られ、その土砂がコンクリート基礎の空洞部に堆積しつつある。

・沖ノ島視認調査

大島の北側砲台跡近くにあるトイレの壁に設置したカメラから、約五〇km沖に浮かぶ沖ノ島の視認調査をほぼ毎日、午前午後と実施している。

例年通り三月から七月までは、PM2・5等による霞などで見えない日も多かったが、八月以降見える日も多くなっており、特に十月と十二月はくっきり見える日が多かった。

（宗像市世界遺産課　岡崇・
福岡県九州国立博物館・世界遺産室　正田実知彦）

三　新原・奴山古墳群の調査

三四号墳は、六世紀中頃～後半に築造された円墳で、現存する墳丘の直径は約十九m、高さは約六mである。墳丘周囲は開墾により平坦に削平されている。墳丘中央部には幅三m長さ六m程度の陥没があり、石室の南壁天井石付近に達している。これまでに発掘調査は行われておらず、築造当時の規模や周溝の有無等は不明である。二〇二一年度、墳丘西側崩落面の

写真一　三四号墳調査状況

写真二　三四号墳石室内部の状況

調査を行い、墳丘盛土と墓道を確認した。二〇二二年度は古墳の規模・形状を確認するため、墳丘周囲のトレンチ調査を行った。調査では周溝が確認された（写真一）。周溝からは須恵器と土師器の破片が出土した。須恵器は甕が出土した。そのほか、性格不明の遺構より土師器の集中的な出土が見られ、坏、高坏等が出土した。土器の年代は六世紀中頃を示す。また、墳頂部の盗掘坑に関して腐植土と崩落土砂の除去を行った。崩落土砂からは須恵器と土師器の破片が出土した。石材が抜かれ開口した右側壁上部から石室の保存状態を確認した。一九七七年に報告されていたとおり、石棚をそなえる横穴式石室であることを確認した（写真二）。三四号墳では二〇二三年度に調査及び保存修理工事を完了する予定である。

また、二基の円墳と考えられていた一五号墳と一九号墳については、二〇一八年度の確認調査によって一基の前方後円墳である可能性が想定されており、二〇二〇年度に追加でトレンチ調査を実施した。前方部角部の周溝と考えられる溝状遺構を検出した。二〇二一年調査では、一五号墳と一九号墳の境付近においてトレンチ調査を実施する。また、一九号墳の墳頂部陥没について、腐植土及び流入土砂を除去する調査を行う。一九号墳の調査は令和五年三月に調査を終了する予定である。

このほか、航空レーザー測量の結果発見された古墳状の地形について確認調査を実施する。古墳分布確認調査は令和五年度に継続して実施する予定である。

（福津市文化財課　永島聡士）

四　その他

（一）宗像市管内遺跡調査

光岡六助遺跡・上高宮古墳の遺物整理作業及び浜宮貝塚の報告書刊行を行った。光岡六助遺跡は古墳時代前期末から後期にかけての集落遺跡で、今年度は接合・復元作業及び遺物実測・トレース図作成を行った。上高宮古墳は、宗像大社辺津宮境内に所在する直径23ｍ前後の円墳で、長方板革綴短甲、蕨手刀子、鏡など約３００点の遺物が出土した。今年度は、遺物クリーニング及び甲冑については九州国立博物館でＸ写真撮影し、接合作業を実施した。浜宮貝塚は、五世紀後半から七世紀にかけて営まれた海浜集落遺跡である。平成三〇年度から令和二年度にかけて3次にわたる調査の結果をまとめた報告書『浜宮貝塚Ⅱ』（註）を刊行した。

（註）豊崎晃史編２０２３『浜宮貝塚Ⅱ』宗像市文化財調査報告書第83集

（白木英敏）

（二）新修宗像市史編纂事業

今年度は本編五巻目（全六巻）『祈りとまつり』の編さんを実施した。内容は、沖ノ島祭祀に代表される原始・古代の祈りとまつりから現代に残る山笠・宮座などの伝統行事、宗像大社をはじめ多彩な宗教建築、宗教美術など、宗像の祈りとまつりをテーマとした最新の調査・研究成果である。

（白木英敏）

（三）福津市管内遺跡調査

今年度は三件の埋蔵文化財発掘調査を実施した。調査の概要は、宮司浜ノ久保遺跡第二地点（古墳～近世・集落）、津屋崎塩田遺跡第四地点（近世～近代・生産）、在自西ノ後遺跡第六次（古代末から近世初頭・集落）である。

（福津市文化財課　松永通明）

（四）デジタル・アーカイブに関わる調査

二〇一九年度年より本遺産群に関わる文化財のデジタル化およびその公開を推進する事業を継続している。

今年度は沖ノ島祭祀遺跡学術調査関係者の聞き取りを全六回行っている。調査成果については次年度以降の沖ノ島研究で報告予定である。

第一回　小田富士雄氏（福岡大学名誉教授）聞取調査
　日時：令和四年六月七日（火）場所：九州歴史資料館
第二回　小田氏・松本肇氏（元宗像大社文化財管理局）聞取調査
　日時：令和四年六月一六日（木）場所：九州歴史資料館
第三回　松本氏聞取調査
　日時：令和四年一〇月一八日（火）場所：海の道むなかた館
第四回　小田氏聞取調査
　日　時：令和四年一一月一〇日 場所：小田氏自宅
第五回　小田氏聞取調査
　日　時：令和四年一一月一六日 場所：九州国立博物館
第六回　佐田　茂氏（佐賀大学名誉教授）聞取調査
　日　時：令和四年一一月一〇日 場所：宗像大社神宝館

「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群　デジタルアーカイブウェブサイト　MUNAKATA ARCHIVES のデータベースの充実を図るための作業は、以下の通りである。沖ノ島祭祀遺跡に関連するデジタル化については、宗像大社に関わる調査研究（一）考古資料を参照いただきたい。古文書データベースについて、宗像大社文書は第四巻の文字データ作成を行ない、公開に向けての作業を進めている。映像データベースについては、宗像大社所蔵の映像フィルムのデジタル化を実施した。

またウェブサイトの多言語対応を進めるため、宗像地域の文化財データベース掲載データの翻訳を実施した。今後もウェブサイト全体のさらなる充実を図っていく。

（五）公開講座について

本遺産群の価値をわかりやすく伝え、遺産への関心を深めるとともに、新たな調査研究の契機となることを目指し、令和元年（２０１９）度から「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群公開講座を行なっている。

令和元年（２０１９）度は平成二十二年から二十四年（２０１０－２０１２）にかけて行われた顕著な普遍的価値を探るための委託研究の成果について行った。

表１　世界遺産「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群公開講座
（令和元(2019)年度から令和四(2022)年度）

		テーマ	講師	会場	開催日
令和元年度	第１回	「沖ノ島祭祀遺跡の調査と成果」	小田 富士雄	海の道むなかた館	令和元年7月15日（祝）
	第２回	「宗像・沖ノ島祭祀の実像－古代の祭式からみた沖ノ島祭祀遺跡－」	笹生 衛	海の道むなかた館	令和元年7月15日（祝）
	第３回	「古代宗像の渡来人」	亀田 修一	カメリア・ホール	令和元年9月7日(土)
		「文献史料から見た古代豪族宗像氏の交流」	森 公章		
	第４回	「沖ノ島祭祀の成立前史」	武末 純一	海の道むなかた館	令和元年9月21日（土）
		「沖ノ島出土銅矛と青銅器祭祀」	柳田 康雄		
	第５回	「五世紀における石製祭具と沖ノ島の石材」	篠原 祐一	海の道むなかた館	令和元年10月26日（土）
		「文献からみた古代王権・国家のカミマツリと神への捧げ物」	西宮 秀紀		
	第６回	「日本民俗学（伝承分析学・traditionology：the study of traditions）からみる沖ノ島」	新谷 尚紀	海の道むなかた館	令和元年11月16日（土）
		「古代神祇祭祀制度の中の宗像社」	加瀬 直弥		
	第７回	「ヤマト王権と沖ノ島祭祀」	白石 太一郎	カメリア・ホール	令和元年12月7日（土）
		「宗像地域における古墳時代首長の対外交渉と沖ノ島祭祀」	重藤 輝行		
	第８回	「神道史上における沖ノ島の祭祀」	椙山　林継	海の道むなかた館	令和2年1月18日（土）
		「国家形成から見た沖ノ島」	ウェルナー・シュタインハウス		
	第９回	「宗像の島々：小呂島、沖ノ島、大島の歴史と地誌」	服部 英雄	海の道むなかた館	令和2年2月15日（土）
		「宗像大社の無形民俗文化財」	森 弘子		
	第１０回	神話と建築にみる宗像信仰	亀井輝一郎	コロナにより中止	令和2年3月14日（土）
		「近世宗像郡の寺社建築と宗像社」	山野 善郎		
令和２年度	第１回	「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群の世界遺産としての価値	西谷　正	オンラインのみ	令和２年7月23 日（土）
	第２回	沈没船から読み解く造船技術と航海	佐々木　蘭貞	オンラインのみ	令和２年９月19 日（土）
	第３回	近世宗像郡の寺社建築と宗像社 ― 建築が伝える記憶 ―	山野　善郎	オンラインのみ	令和２年10月17日（土）
	第４回	中世宗像における宗像三女神信仰	河窪　奈津子	オンラインのみ	令和２年11月14 日（土）
	第５回	世界から見た沖ノ島 ― 祭祀、政治、交易の物語の創造 ―	サイモン・ケイナー	オンラインのみ	令和２年12月19 日（土）
	第６回	竹幕洞祭祀遺跡と沖ノ島祭祀遺跡	禹　在　柄	オンラインのみ	令和3年1月16 日（土）
	第７回	世界遺産の保存管理 ― 文化、自然、人々を中心としたアプローチ ―	ガミニ・ウィジェスリヤ	オンラインのみ	令和3年2月20日（土）
	第８回	世界遺産の景観を守る ― 宗像・福津の風景 ―	仲間　浩一	オンラインのみ	令和3年3月20 日（土）
令和３年度	第１回	「海の古墳」としての新原・奴山古墳群	魚津 知克	カメリアホール	令和３年 ７月２２日（木・祝）
	第２回	「沖ノ島の奈良三彩」	高橋　照彦	オンラインのみ	令和３年 ８月２１日（土）
	第３回	「沖ノ島の鏡」	岩本 崇	オンラインのみ	令和３年 ９月１８日（土）
	第４回	「沖ノ島の馬具を復原する」	桃崎 祐輔	海の道むなかた館	令和３年１０月２３（土）
	第５回	「沖ノ島の玉、滑石製品を中心に」	清喜　裕二	海の道むなかた館	令和３年１１月２０日（土）
	第６回	「沖ノ島の紡織具」	東村　純子	海の道むなかた館	令和３年１２月１８日（土）
	第７回	「宗像・沖ノ島の武器と武装」	齊藤 大輔	海の道むなかた館	令和４年 １月１４日（金）
	第８回	「沖ノ島のガラス」	中井　泉、福嶋　真貴子、四角　隆二、阿部　善也、加藤　千里、村串　まどか	オンラインのみ	令和４年 ２月２３日（水・祝）
令和４年度	第１回	「瀬戸内航路の神々と倭王権　―住吉・大山祇・宗像―」	森田 克行	カメリアホール	令和4年7月16日（土）
	第２回	「壱岐・対馬の海洋信仰と祭祀」	堀江 潔	海の道むなかた館	令和4年9月10日（土）
	第３回	「古代北陸の航海・境界に関わる祭祀遺跡―寺家遺跡を中心に―」	中野 知幸	海の道むなかた館	令和4年10月15日（土）
	第４回	「古代瀬戸内海の島々と祭祀遺跡」	妹尾　周三	海の道むなかた館	令和4年11月19日（土）
	第５回	「日本の神々と海から考える宗像信仰の意義」	ファビオ・ランベッリ	オンラインのみ	オンラインのみ
	第６回	「日本近世の航海信仰からみた古代の持衰」	山内　晋次	アクロス福岡	令和５年2月18日（土）
		「南方世界の造船・航海術と信仰」	後藤　明		

※過去の公開講座はすべて MUNAKATA ARCHIVES・YouTube で動画を公開しており、下記より閲覧可能。

https://www.munakata-archives.asia/　　https://youtube.com/@okinoshimaheritage5116

令和二年（２０２０）度は、本遺産群の世界遺産としての価値、国際的な価値と保存管理をテーマに行った。

令和三年度（２０２１）度は「沖ノ島祭祀と人の関わり」という観点から「古墳群」や「奉献品」の考古遺跡に焦点をあて講座を行なった。特に、奉献品についての報告では、いくつもの最新の知見が示される。この講座では事前に講師が実際に展示されている奉献品を前に、そのみどころを解説する「解説動画」の制作を行った。

令和四年度（２０２２）は、特別研究事業と連携して「海と人々の関わり」をテーマに海の信仰に関わる遺産について国内外の事例について報告が行われた。

新型コロナウイルス感染症の流行により、令和元年度第10回の講座は中止となり、令和二年度は録画配信に特化した形で行った。令和三年度は感染状況をみながらの開催であったが、令和四年度は全て対面での開催することができた。

全ての講座については録画をMUNAKATA ARCHIVES、本遺産群の公式ホームページで公開しているので、ぜひご覧いただきたい。

（岡寺未幾）